HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『腐蝕』論
Author(s)	丸尾, 常喜
Citation	北海道大學文學部紀要, 21(1), 59-98
Issue Date	1973-02-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33374
Type	departmental bulletin paper
File Information	21(1)_PR59-98.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『腐蝕』論

丸尾常喜

『腐蝕』論

丸尾常喜

目次

はじめに
一、『腐蝕』の成立
二、現実暴露の文学
三、趙恵明の形象　その一
四、趙恵明の形象　その二（補説）
五、趙恵明の形象　その三
おわりに

はじめに

一九四五年八月、八年間におよぶ日中戦争（正確には十五年間というべきだが）は、日本の敗北によって終わりを告げた。この八年間の抗戦は、中国人民にとって、基本的につぎの二つの闘争を意味していた。

北大文学部紀要

㈠一切の帝国主義の侵略からの脱却（抗日戦期の課題として、日本帝国主義の侵略の排除）。

㈡民主政治の獲得（封建勢力と買弁階級の人民に対する圧迫の排除）。

したがって、このたたかいは、抗日戦の勝利後も、さらに四年間ひきつづいてたたかわれねばならなかったのである。多くの中国の文学者たちにとって、この二つの民族的課題は、そのまま明確に自らの文学的課題として認識された（茅盾「八年来文藝工作的成果及傾向」）。そのことが抗戦期の中国文学の発展をささえた。戦後、わたしたち日本人の目の前に、戦時中の中国文学がようやくその姿を見せはじめたとき、それはおどろきをもってむかえられた。竹内好氏は一九四八年につぎのように書いている。

「私は戦争が中国文学を荒廃させるだろうと思った。じっさい中国が受けた戦禍は日本の何倍もひどかったのだから。ところが、戦争をへた中国文学は意外にもみずみずしくなり、あきれかえるほど芸術的になった。戦争が人間の魂を深めることもあるということを、私ははじめて知った。(1)」

また、茅盾のはたらきにふれてつぎのようにもいっている。

「抗日戦争の初期に復活したスローガン文学化の傾向を排斥し、他面、通敵と妥協の有閑文学を粉砕し、あくまで文学の発展と民族の進歩を一致させる方向を守ったのは、かれによって築かれたレアリズムの伝統であった。(2)」

茅盾の長編小説『腐蝕』を対象とする小論の意図も、抗戦期における中国文学の発展の一端を明らかにすることにある。竹内氏のいう「文学の発展と民族の進歩を一致させる方向」が、具体的にはどのように追求され、どのような達成をみたのか、このような視点から、『腐蝕』の検討をこころみることが小論の目標である。

一、『腐蝕』の成立(3)

日中戦争は、一九三七年七月にはじまった。八月十三日、日本軍は上海に進攻した。十一月、八十数日の激戦の末に上海は陥落した。茅盾は上海を離れて香港へむかい、さらに長沙を経て武漢へ行った。生活書店の計画した新しい文芸雑誌(『文芸陣地』)の主編に招かれ、翌三八年二月に広州に移った。だが、薩空了(サーコンリャオ)に請われて、当時香港で復刊の準備中であった新聞『立報』の副刊『言林』の主編を兼ねることになり、香港に住むことになった。広州へは月に二度おもむいて『文芸陣地』(半月刊)の編集にあたった。同誌の創刊号は、四月十六日に発行された。これよりさき三月二十七日に、文学者たちの抗日統一戦線の組織――「中華全国文芸界抗敵協会」(文協)が、武漢において正式に成立し、茅盾は理事に選ばれた。『言林』のために長編小説『第一階段的故事』(原題は『爾往哪里跑』)の連載をはじめた。前半は上海戦争を、後半は上海陥落後の武漢を舞台に、さまざまの階級の人物を配して、各人の選択と帰趨を追究するという雄大な構想の作品であったが、準備不足のため途中で連載の継続に苦しみ、八カ月後、前半を過ぎたところで執筆はうちきられた。

一九三八年十二月、茅盾は杜重遠(トゥチュンユアン)の要請にこたえて、ウルムチの新疆学院文学院院長に就任するため香港を離れた。その間十月二十一日に広州、二十五日に武漢が陥落し、抗日戦は新しい局面をむかえていた。『文芸陣地』は発行地を香港に移し、編集は楼適夷(ロウシーイー)にひきつがれた。茅盾が香港を発って海路ハイフォンにむかった十二月二十日の二日前、汪精衛(ワンチンウェイ)(国民党副総裁)は重慶から空路ハノイへ飛び、日本側に投降した。

茅盾は、ハノイから昆明へむかい、昆明から空路蘭州(甘粛省)に飛び(三九年一月)、そこで四十数日間滞在したの

ち、新疆にはいった。かれが新疆におもむいたのは、香港では文筆で生活を維持することが不可能であったためであるという。だが、当時新疆が、省主席盛世才（ションシーツァイ）の「親ソ連共」政策のもとで、つぎのような実況を呈していたことも、一つの重要な理由ではなかったかと思う。

「新疆は、日本の中国侵略に際して、立派に祖国に対する責務を果たしていた。というのは敵にとって手のとどかぬ、はるかに彼方に位置しているので、新疆は中国にとって重要な後方基地となったからである。五年足らずの間に、中国本土のこの遠い片隅には、いくつもの油田、鉱山、工場が建設された」（フェドレンコ著、木村浩訳『新中国の芸術家たち』朝日新聞社）。

ウルムチでは、多数のソビエト人技術者が仕事をしていた。そこでの文化活動がかなり活発であったことも、フェドレンコの記述から知ることができる。茅盾は教職のかたわら、文化協会の責任者としてはたらいた。しかし、盛世才は実質的には猜疑心のつよい独裁的な軍閥政治家にすぎず、その内政の実質も特務政治であったため、盛の率直な友人であった杜重遠（当時新疆学院院長）は、かえってその疑惑を招くことになり、四〇年五月末（または六月初め）「漢奸」という事実無根の罪名（盛が「反ソ反共」に転じたのちは「共産党員」という罪名にかわった）によって投獄され、数年後に獄死した。茅盾がウルムチを離れたのは、杜の投獄の直前であったが、それもおそらくこうした事態の経過と無関係ではなかったであろう。(4)

一九四〇年五月にウルムチを発った茅盾は、そこから延安へむかい、数カ月滞在して魯迅芸術学院で講義をしたのち、十月延安を離れて南下した。まず西安に出て、宝鶏・広元を経て、重慶にいたる旅は、『西北見聞記』(5)の中の数篇に描かれている。この散文集に収められた文章の多くは、四一年の春に執筆された。軽快なタッチと硬質の文体

で、西北大後方[6]の戦時下の混乱と頽廃、物価の高騰に悩む人民の生活を描いて、強靱な批判精神の横溢したすぐれた作品となっている。これらの作品は検閲への顧慮のためぼかされた部分も多く、それでもなお重要部分の削除を免れなかったが、その中でひときわ光彩あざやかな一章が、「白楊礼讃」（一九四一年三月執筆）である。一九四〇年十二月重慶で書かれた「風景談」[7]とともに、風景描写に託しつつ、解放区人民の活気に満ちた労働生活と抗日戦をささえる素朴・堅忍・向上の精神とをたたえた美しい「讃歌」である。

茅盾が延安を離れるころ、江蘇省主席韓徳勤（ハントーチン）のひきいる国民党軍が、江蘇北部にあった新四軍陳毅（チェンイー）支隊を武力攻撃するという「蘇北事件」が発生した（十月十四日）。いわゆる「第二次反共高潮」のはじまりである。茅盾が重慶に着いたのは四〇年初冬であったが、共産党は合法闘争の一つとして、当時反動派の妨害と弾圧のため停刊状態にあった『文芸陣地』の復刊を援助する計画をたて、茅盾の同意を得てその仕事にとりかかった。かれの身体の不調と他の工作のつごうで、単独で編集にあたることが不可能であったため、七名からなる編集委員会がつくられた。復刊第一号（六巻一期）は一九四一年一月十日に発刊された。ところが、一月四日に葉挺（イエティン）、項英（シアンイン）の指揮する新四軍九千人の部隊が、顧祝同（クーチュートン）のひきいる国民党軍八万余に包囲攻撃され、十四日に、わずか一千人が包囲を突破したのみで、大部分が戦死を遂げるという衝撃的な事件が、安徽省南部でおこった（「皖南事変」）。各地で反動派による弾圧事件が多発し、抗日統一戦線はもっとも重大な危機に直面した。「皖南事変」の報道は厳重な管制を受けて禁止され、十七日の『新華日報』（重慶で発行された共産党機関紙）は、事変に関する社論全文の削除を受け、わずかに題詩のみをのこして発行された。題詩は周恩来（チョウエンライ）の手になる四言の詩で、「為江南死難者誌哀、『千古奇冤、江南一葉、同室操戈、相煎何急』」（「江南の死難者の為に哀（かなしみ）を誌（しる）す、『千古の奇冤（きえん）、江南の一葉、同室戈（ほこ）を操る、相煎（にる）ること何ぞ急なる』」）というものであった。

穆欣（ムーシン）の「新聞界大事記要」によると、多数の労働者、学生がこの紙面に対して痛哭し、当日の発行部数は五倍にふえ、一角のものがついに三十元に値上がりするほどの奪いあいであったという（こうした事実は『腐蝕』一月十九日の章にそのまま描かれている）。

重慶にいた文化工作者たちの多くは、言論弾圧がつよまるとともに、一つには「実力を温存」するため、一つには「国民党反動派に対する抗議を表明」するため延安行きと香港行きの二手に分かれて重慶を離れた。鄒韜奮（ツォウタオフェン）は、「皖南事変」と各地の生活書店五十余カ所の封鎖に憤って、二月桂林を経て香港に飛び、途中電報で国民参政員の辞任を通告、はげしく反動派の「逆コース」に抗議した。茅盾も同日、変装、変名の上桂林にのがれ、さらに空路香港へむかった。同様に「第二の戦場」を開くために香港に移った文化人に范長江（ファンチャンチアン）、胡繩（フーショー）らがあり、また『文芸陣地』編集委員会のメンバーも、沙汀（シャーティン）、曹靖華（ツァオチンホア）が別の任務で重慶にのこったほかは、宋之的（ソンチーティ）、章泯（チャンミン）、葉以群（イエイーチュン）らがそれぞれ秘密裡に同地におもむいた。

一九四一年五月十九日、鄒韜奮主編の『大衆生活』（週刊）が香港で復刊された。茅盾も編集委員会に参加、創刊号から長篇小説『腐蝕』を連載した。同月二十九日に、茅盾は、鄒韜奮、范長江ら九人との連名で、国民党の対日投降、妥協の傾向と文化事業に対する残酷な迫害とに抗議する文書（「我們対于国事的態度和主張」）を発表した。九月一日、茅盾主編の『筆談』（半月刊）が創刊され、両誌の売行きも順調にのび、香港は着々と「第二の戦場」の役割を果たしつつあった。『腐蝕』は大きな関心と共感をあつめ、途中読者の要望によって当初の構想を変更し、現在わたしたちが見るとおりに後半部をつけたして、半年間の連載を終わり、十月に単行本として出版された。

一九四一年十二月八日、太平洋戦争が勃発した。十八日、日本軍が香港に上陸した。翌四二年一月九日、茅盾夫妻

は、東江遊撃隊の援助のもとに封鎖線を突破して九龍にわたり、恵陽まで送られたのち桂林へ行った（桂林到着は三月）。このとき、東江遊撃隊の手で本土へ送られた文化人、外国人は前後数千人におよんだ。茅盾は桂林に九ヵ月滞在して、『劫後拾遺』、『霜葉紅似二月花』などを執筆、その後重慶に移った。抗日戦の終わるまで重慶に住んだ。一九四五年はじめて戯曲をこころみ、『清明前後』（五幕）を完成させた。抗日戦の勝利は目前にあったが、この作品はすでに新しいたたかいの序曲を、怒りをこめて吹きならしていた。

二、現実暴露の文学

中国にも大政翼賛会的な文学がなかったわけではない。だが、それらは「特務文学」というはなはだ光栄ある名称でよばれている。一例をあげればつぎのようなものである。(8)

ある特務工作員が死んだあと、その妻が夫の意志を継いで特務になる。だが正式の特務となることは容易ではない。彼女は特務機関のために多くの仕事をしとげるが、すべて外郭的な仕事にすぎない。それでもくじけずに特務工作をつづけ、ついに肉体を漢奸と日本軍人に献げて任務を全うする。――何其芳（ホーチーファン）はげしい口調でつぎのように述べている。「この特務文学の作者はつぎのような人生観を宣伝しているのだ――特務は現代の『英雄』である。だから人生の『最高の理想』は特務になることであり、だから肉体を漢奸と日本のファシストに与えることも『英雄』的な行為である。その芸術観も明白である――どんなに破廉恥な書きかたをしてもよい、どんなに現実を歪め読者を欺いてもよい、特務とその主人たちのお役に立ちさえすればというのだ。知識分子はここまで堕落することもでき、文芸もこれほどまで堕落することができるのだ！」(9)

「皖南事変」以後、国民党統治区では、作家たちの創作の自由が極端に制限され、「集中営」（政治犯収容所）の入口だけがひろく開かれた。頌揚だけを認め暴露を許さない当局の文芸政策は、作家たちにつぎの三者択一をせまっていたのだった。目を閉じてうそをつくか（「特務文学」など）、現実を回避するか（芸術至上主義、「文芸と抗戦無関係論」など）[10]、筆を捨てて沈黙するか。だが「五四」以来の伝統をひきついで、作家たちはさまざまなたたかいかたをこころみた。その代表的な成果が、郭沫若の戯曲『屈原』（一九四二年）である。ふたたび何其芳のことばを借りよう。「分裂と逆流の暗影が重苦しく中国の大地と中国人民の心を圧していた。しかし当時の大後方の人民にはまだ今日（一九四六年——引用者）ほどの条件がなく、今日のように広範に『内戦反対』の叫びをあげることができなかった。この叫びと憤怒は、ようやく少数の代表者をさがしあてて、屈折した方式で表現された。」「眼前の現実に対して、中国のゲッペルスの徒しか発言権をもたないとき、作家たちはやむを得ず迫られて歴史を書いた。」[11]　現実が作家に強いたこのようなたたかいかたが、民族的な憤怒と作家の資質や蓄積とを十分に結びつけて、一つのみごとな開花をみせているところに、『屈原』の芸術としてのみずみずしさがある。

社会科学の分野では、たとえば丁易（ティンイー）の『明代特務政治』（執筆一九四五～四八年）[12]も同様のたたかいの産物であった。かれもいよいよ猖獗をきわめる国民党特務の罪行を、公然と攻撃しようとして果たせず、そのため特務のもっとも凶暴に横行した明代に注目し、この実証的で戦闘的な論文を書きつづった。

ところで『腐蝕』の場合は、イギリス植民地の香港で執筆、発表されたため、それが本土への普及をもめざすかぎり言論の弾圧をまったく顧慮しないということはできなかったとしても、かなりの自由のもとで、国民党の暗黒政治に正面から相対することができたであろう。中国における『腐蝕』の評価は、それぞれにニュアンスのちがいはあっ

ても、国民党の暗黒政治の「暴露」が作品の主題であり、作者の第一の意図であるとすることでは、すべて一致している。それらを総合した評価をあげれば、つぎのとおりである。

「(『腐蝕』は――引用者)国民党のひきおこした第二次反共高潮(「皖南事変」)を背景にして、大後方の国民党支配の血なまぐさい罪悪をあばき、国民党反動派の反共的、反人民的な、漢奸と結託した売国的な陰謀をえぐり出した。鋭利な刃のごとく、作者は『平和な光景』に満ちた、『救国抗日の呼声』の高い臨時首都重慶の醜悪な面貌を切りひらき、国民党ファシズム支配の核心部分――特務機関の血なまぐさい罪行を明るみにひきだした。(13)」

「核心(部分)」ということばは、わたしの見たかぎりではさきに述べた丁易の『中国新文学史略』(一九五五年。作家出版社)ではじめて用いられ、以後ほとんど踏襲されている。

茅盾の主観的意図が第一にこの「暴露」にあったであろうと推定することは、前述したかれの閲歴からもある程度自然なことであるし、「文協」成立時以来のかれの理論、批評活動から考えても十分根拠のあることである。したがって、わたし自身もこの点では中国における現在までの評価の趨勢に特に異論をさしはさむつもりはない。理論、批評活動についてはあとでふれることにして、まずこの「暴露」の方法と内容とを簡単に検討しておこう。

『腐蝕』は、趙恵明(チャオホエミン)という女性の特務工作員の日記の体裁をとっている。一九四〇年の九月十五日から翌四一年の二月十日まで、断続的につけられた五十二日分の日記のすべてに日付が記されている。途中十二月三十日の章を境に前半と後半とに分かれ、そこで舞台は趙恵明の転勤にしたがって重慶市内から近郊の「大学区」に移動する。ストーリーは、前半では、㈠趙恵明と特務工作員たち(重慶政府側の特務=R主任・陳(チェン)秘書・G・小蓉(シャオロン)・Fなど。南京傀儡(かいらい)政府側の特務=松生(スンション)・舜英(シュンイン)。舜英は恵明の学校時代の同級生)との交渉、㈡趙恵明と小昭(シャオチャオ)(恵明のかつての愛人で合作社運動の活動

家）との交渉、㈢趙恵明とK、萍（ともに共産党の地下工作者。萍は恵明の学校時代の同級生）との交渉、の三本の糸、後半では、㈠趙恵明とN（女子学生で三民主義青年団員）との交渉、㈡Nと特務工作員たち（F・老倀など）との交渉、の二本の糸のからみあいで進行する。読者はもっぱら恵明の行動と観察とをとおして国民党支配の暗黒部にふれていくことになる。

この日付の設定は、対日妥協への地ならしである「第二次反共高潮」の意味を明らかにする上できわめて重要である（上限と下限とがわずかに前後しているだけで、ほとんど茅盾の重慶滞在期と重なっているのも興味をひく）。

「九・一八」記念日、趙恵明たちは三カ条の特別任務を負って仕事に出かける。「もっとも活動的な人物をマークする、かれらの間の関係に注意する、目標をひとり選んで猟の対象とする。」この「目標」が通敵分子ではなく、抗日の事実上の支柱であり、自らの同盟者である「異党」（共産党）分子であるところにことの重大さがある。松生・舜英の夫妻が上海から重慶へやってきて、なかば公然と重慶政府の要人や特務たちと往来をはじめる。巨大な陰謀が進行していき、特務たちはあわただしくかけまわる。「蘇北事件」の風聞が伝わってくる。かつての「三千を無実で殺すとも、一人をして網を漏らしむるなかれ」[14]というスローガンが復活する。特務の陰険で残酷な手段――尾行・スパイ工作・買収・「色じかけ（原語「美人計」）」・拷問・殺人などが直接間接に暴露されていく。十一月になると、舜英の口からつぎのようなことが語られる。

『掃共戦は、すでに準備万端ととのっているんですよ。たいへん大がかりで、やがて事実が証明するわ。』……『これから平和になるんだわ。分裂状態だって、すぐにおしまい。みんなで南京に帰るのよ。ね、とってもすてきでしょう。』（十一月十九日）。

一月に「皖南事変」がおこる。『新華日報』をめぐる事件については、さきに簡単にふれた。特務たちはいたるところに散開し、猟犬のように耳をそばだて、眼をみはり、鼻をつきだす。

『この数日、世の中まっくら。だれだって見るに見かねるわ。人間を人間と思ってはいないのだから。』……『わたしのクラスは、昨日は三十何人だったのに、今日は十何人きり。だれもが生きてるのか死んでるのかわからぬ顔つきで、悲しみでいっぱい。とてもみじめだわ。』（一月三十一日、Nのことば）。

このような状況が、特務たちの個人的な思惑や利益の追求、相互の暗闘やさまざまの頽廃を温存しつつ、むしろそれらにささえられて、全体として冷酷に支配層の利益追求を貫徹していくところにファショ政治の論理がある。闇商人の「囤積（とんせき）」（買い占め）や密輸の摘発に名を借りて金をゆすりとり、自らもかれらと合作して金もうけを図る。利益の分配をめぐって内輪げんかをする。漢奸に情報を売る。フレームアップをする。これらのことはすべて黙認され、人民の弾圧という一点に支配者の意志は集中する。特務の間には相互に二重三重の監視が行われる。

「人」は「腐蝕」されて、利己的で猜疑心のつよい「狐」や「狗（いぬ）」や「鼠」になる。

「ここでは、だれもが笑いの奥に刀をかくし、他人をおだてて屋根にのぼらせ、梯子（はしご）をはずす、わなをしかけて誘いこむ……、全身の神経をすこしでもゆるめたら、必ず罪におとされるのだ。」（九月十九日）。「必要なのは陰険さと卑劣さだ――一口で言えば、人間らしくない連中ほど、やりかたがある。」（十月二日）。「かれのような人間は、計略も深く、やりかたも悪辣で、疑ぐり深い。かれから見れば、だれもかれも自分同様の悪者（わるもの）で、人から咬まれるのでなければ、人を咬まねばならぬのだ。」（九月二十二日）。

魯迅は、「大小無数の人肉の饗宴は、文明がはじまって以来今日までつづいており、人々はその筵席で人を食い、

人に食われ、悪人の愚昧な歓呼で、弱者の悲惨な泣き声をおおっている。女こどもはいうまでもない。」（「灯下漫筆」一九二五年、『墳』所収）といっているが、権力の走狗である特務の世界で、人間のこのような関係はいっそう煮つめられる。そこで女性は「色じかけ」の手段、人を釣り上げる餌となるだけではない。陳秘書とGはそれぞれ趙恵明の肉体を狙っており、すきを見て彼女を窮地におとし入れ、彼女の方から援助をもとめてふところに飛びこんでくるのを網をひろげて待っている。このような暗黒の構造が、恵明自身の必死のたたかいにもかかわらず、しだいに彼女を追いこんでいく過程をとおして、その非人間性がいよいよ明らかにされていく（くわしくは次章でふれたい）。

こうした「腐蝕」の世界が、一人の青年をしだいに「腐蝕」していく様子は、Fの形象に表現されている。読者はストーリーの発展にそって、はじめ一片の人間性をのこしているかに見えたFが、食べるためには無実（？）のものを罪におとす（「誇張して報告する」）ことをも辞さない人間であることを知らされる。だれも人を信用できない。

『でも時々は一歩さがって考えてみるんです。……どっちみちぼくがやらなくても、やるものがいないわけではないでしょう。かれらだって誇張して報告するでしょうし。』（十月二十四日）。「Fのような人間が、わたしに対しても『口と心がちがう』といったらそれは冤罪（えんざい）というものだろう（この点だけは明らかだ）。だがかれだって自分を救うためには、『良心の苦痛』を感じつつも、わたしの首をかけることだってしかねまい。」（十一月十日）。

そのFもひとたび人の上にたつ地位についたとき、陳やGと同じように、Nの肉体を手に入れるために画策する「愛国者」に成長するのである。

ところで抗日戦争は、国民党と共産党という二つの政党（および両者の指導下にある軍隊）を中心としてきわめて広範な人々を結集した統一戦線によってたたかわれた。そのため抗日戦の初期には文芸運動のすすめ方についてかなりの

不分明さをのこしていた。各地の文芸工作者たちは、抗戦意識の活発な高まりを背景に、直接民衆の中にはいり、その視野を広げ、題材を豊かにし、自分たちの欠陥を新しく認識して、多くの実験的なこころみを行なった。したがって、文学史上にこの期間のもつ意義はきわめて大きい。だが、さきに述べた不分明さは、たとえば張天翼（チャンティエンイー）の「華威（ホワウェイ）先生」（『文芸陣地』創刊号、一九三八年四月）の評価にあらわれた、抗戦陣営の醜悪面を描くことが、抗日戦の遂行に消極的作用をおよぼしはしないかという危惧の存在などである。このような危惧は、一方では創造面でスローガン文学を生み出す一つの土壌となった。こういう状況の中で、茅盾の批評、評論活動の重要な面は、抗日戦が光明と暗黒との錯綜する複雑な過程をたどるものであることを指摘し、光明の中に潜在する醜悪を研究・暴露することの強調にあった（「論加強批評工作」「八月的感想」「暴露与諷刺」[15]など）。この「暴露」が抗戦期の文学（国民党統治区の）のリアリティを保証する重要な要素として意識されていたのである。

武漢陥落後の国民党の後退によって、単純な民族的観点だけでは、現実はいよいよとらえがたくなり、民族矛盾と階級矛盾のいずれをも切りすてることなく、全体的、構造的に現実をとらえることが、リアリズムの課題としてつよく要請されてくる。茅盾のいう「暴露」はこうした線上に位置している意識的な創造方法であった。国民党の言論弾圧のもとで暴露と諷刺を貫くことはきわめて困難な仕事であったが、なんらかの形で多くの文学者たちがこれをこころみ、支配層がいかにこれを憎みおそれたかは、張道藩（チャンタオファン）（文化特務の頭目）の「我們所需要的文藝政策」（一九四二年[16]）が示しているところである。このような意味で、『腐蝕』はまず第一に《現実暴露の文学》であったのである。

三、趙恵明の形象　その一

『腐蝕』は、いままでみてきたとおり、《現実暴露の文学》であった。しかし、いうまでもなく『腐蝕』の芸術的特色は、この暴露が、趙恵明という一人の若い女性の内面世界の展開をとおしてなされている点にあり、これが作品に芸術的リアリティを与え、読者の感動を生むところとなっている。

趙恵明のことばに、「人間は、境遇が複雑だったら、その心だって複雑なものよ。」（十一月三十日）というのがあるが、その心理の複雑さを、複雑さのままにきめこまかに追究していく作者の技倆にはなみなみならぬものがある。読者は、物語の主人公であり、日記の書き手でもある恵明の、状況に対する認識と理解、それに触発される複雑な心理（苦悩・憎悪・憤怒・嫉妬・幻想・自己弁護・自嘲・居直り・恐怖・混乱など）とに、ひとつひとつつきあっていくことによって、恵明の形象や作品の思想を把握することをもとめられる。そのため、時々はたと立ちどまったり、それまでの理解を訂正させられたりする。しかし、全体にわたって作者の主人公への愛情と批判、主題への集中と抑制とはみごとに一貫しており、叙述の混乱もなく、その人間像はたいへん鮮明である。

そのことは丁玲（ティンリン）の『莎菲女士的日記（シャーフェイ）』と比較した場合にいっそうよくわかる。同じように一人の若い女性の内面世界の葛藤を対象とした日記形式をとってはいるものの、莎菲は丁玲の分身であり、作者である丁玲自身のはげしい感情の表出がこの作品を一貫している。「自己告白体」[17]といわれるとおりである。それがこの作品の長所でもあるが、丁玲と莎菲とが一体化して、批判と抑制が妨げられているために、叙述が混乱し印象の混濁をまねいているのは否定しえないところであろう。むろん莎菲の形象は現代中国文学史の中できわめて重要な位置を占めており、この作

品が『腐蝕』の創作過程に形式の面でも形象の面でもなんらかの影響を与えたであろうことは、想像にかたくない。

作品の冒頭、九月十五日（恵明二十四歳の誕生日）の日記はつぎのような記述ではじまっている。

「このごろ感じるいちばんの苦痛は、話のできるところがないということだ。心のなかには、話したいことが山ほどあるのに、思うぞんぶん話をさせてくれるひとりの人もいない。」

「このごろわたしはいっそう自分を軽蔑するようになった。それはわたしがまだ『希望』というものをもっているからだ。ときには夢想することまである。よく白昼夢を見る。親友がいてなんでも話せて、心から笑っているところや、天地のひっくりかえるような大変動が、過去のわたしを深々と埋めて、生まれかわったもうひとりのわたしが、お日さまの下で話したり笑ったりしているところや——その上、わたしにふさわしい仕事をしているところなど。」

この記述は、上述したような非人間的な特務の世界に、心ならずも生きている一人の若い女性の悲しみを惻惻と伝えて、『狂人日記』の「自分は人を食いたいし、人から食われるのはこわいし、みんな疑ぐり深い眼で、互いに盗み見をする。こんな考えをすてて、安心して仕事をし、道を歩き、飯を食い、睡ったら、どんなにいい気持だろう。」という個所を彷彿させる。

趙恵明。父は旧内政部官僚。もと高級小学の教師。五、六年前までは、心安らかに人間の歩むべき道を歩んでいた。「一二・九」（一九三五年）のときは同級生たちと隊伍を組んで、上海から南京へ請願にきた学生たちの激励にでかけたり、学園闘争に情熱を傾けたこともある。小昭と一年ほどいっしょに暮し、別れた。このころ希強（シーチャン）という男と関係ができ、「さまざまの脅迫と誘惑」を受けて、ずるずると特務の世界に足を踏みいれてしまった。……一年前に一

児を生み産院に遺棄する、と日記のあちこちから断片を集めていくと、過去の趙恵明のイメージをある程度合成することができる。だが大部分は想像で補わねばならない。どのような過程を経て彼女が特務の境涯におちこんだかについて、作者は形象的表現をほとんど行なっていない。また、恵明が「わたしの手は純潔な罪なき者の血にまみれている」というとき、彼女自身の罪業の具体的な表現はまったくなく、数カ所で暗示されているにすぎない。この二つはともに、『腐蝕』の創造過程の解明にあるヒントを与えてはいないかと思われるが、これについてはのちにふれることにしたい。

日記の主人公は、最初から、「一方で極度に自分の環境を憎悪しながら、一方では一日一日ごまかしてすごしている」内面に矛盾をはらんだ存在として登場してくる。彼女にはまだ良心や羞恥心があり、特務といえども、何から何まで上司の指示どおりにやり、「猟犬のように、目的物にかみついたら、さっそくくわえて帰って主人にささげる」というところまで堕落してはいない。そこに問題のすべてが存在する。彼女をとりまく世界が、一刻も神経の弛緩をゆるさないものであることは、さきにみたとおりであるが、彼女がごまかして何とかやっていける時期、つまり自分自身を守るだけでよいあいだは、この問題は表面化してこない。自分の周囲のすべてが、憎悪と軽蔑の対象となり、生きる目標は「復讐」の一点にしぼられている。

「わたしはなんの係累もない一匹狼となって、自分の憎悪し軽蔑しているものに対して、情けようしゃなく復讐をせねばならぬ。」(九月十五日)。

他の特務たちと同じように自分も悪党となって、「毒をもって毒を制する」——そのために彼女の自負する機知、愛嬌、「男まさりの気魄」(「わたしは女々(めめ)しい女ではない」ということばが、日記のあちこちに書かれている)、「狐どもをあしら

う経験」、激しい憎悪、冷静な忍耐などのすべてが動員される。

ところが、恵明のこうした生活は、小昭が「囚人」として彼女の世界にとびこんできて、彼女が「看守」(「昔の関係を回復し、転向と自供をすすめる」)の任務を課せられるときになって、はじめて徹底的な試練にさらされることになる。この任務の背景には、Gたちの陰謀がある。「小昭のことも心配だし、自分のことも気がかりだ。」「わたしはもう人間ではない。一本の生きた柔かい繩だ。だが、やはり人間だ。感想もある。思い出もある。会いたくてたまらない気持もある。……」(十一月十二日)。恵明はこのような内面の矛盾をかかえつつ、小昭に接触していく。

作者は、歴史を逆転させようとする大きな陰謀と、このGたちの陰謀とを、同時にすすめることによって、恵明の試練をいっそうきびしいものにしている。十一月十二日から二十日までの八日間、小昭を救いだすことと、Gたちの陰謀から自分を守ること(そのため一応の任務は全うすること)との両方を達成するために、彼女が必死の努力を払うこの部分が、作品の最大のヤマであり、状況に翻弄される恵明の姿をとおして、われわれは、特務世界の非人間性と、巨大な陰謀の進行とを同時に感じとることになる。

だが、恵明の行動のいっさいが、小昭への盲目的な愛情はあっても、その「志」に対する認識の浅さにもとづいてなされているために、ひたむきな行動も空転し、その仕事はなかなか進まない。そのうちに、小昭は脱走の計画を練りはじめ、恵明の協力をもとめてくる。一方ではあちこちで「異党分子」の弾圧がはじまり、Gたちは恵明が「上役をだましている」という攻撃をしかける。窮地にたった彼女は、結局、小昭に「きっぱりと自白をする」よう要求する。だが、小昭の方はそのとき、情勢の進展を察知して、すでに死を覚悟している。最後の日、小昭は恵明に「いまのうちに足を洗う」よう暗示し、二人の仲間(Kと葬)に自分の様子を知らせてくれと頼んだあと、恵明の留守中に

どこかよそへ移される。十一月二十日、空襲警報にもかかわらず待避せず、大型爆弾が落ちて、自分と周囲の一切が煙塵に帰すことを願い、さらにその願いにさえ自ら虚偽をかぎつけないわけにはいかない恵明の日記を読みつつ、われわれが感じるのは、やはり圧倒的な歴史の流れであり、その流れに翻弄される恵明の姿である。われわれは、小昭に自白をすすめるという彼女の行為も、そうした大枠の中で、いつの間にかゆるしてしまいそうなのであるが、恵明がほんとうの試練にさらされるのは、そのあとである。

その後、一時の衝撃から立ち直った恵明は、わが身にせまった危険に反撃するために、先手をとって申し出たはずの報告の中で、問いつめられてKと萍の名前をだしてしまう。恵明の自我の分裂は、ここで極点に達する。この部分をややくわしく追いかけてみよう。

耐えがたい自責の念の一方で、恵明の脳裡に小昭と萍の間柄に対する嫉妬が頭をもたげ、かれの誠実さにまで疑いをはさむ。そしていっそさばさばしたような気持になる。居直って、「温暖を求めず、むしろ厳寒を願う」といってみたりする。だが、たちまち「自分が曠野を、狐のお化けと連れだって、さまよい歩いている」ような感じにおちいって、そんな人生がなんになろうと思う。そして、まさか小昭が自分に対して不誠実だったりするわけがないと、思い直す。こうした混乱——自己弁護と自己嫌悪との交錯を、作者は丹念に追究している。

「あの日わたしがKと萍のことをもちだしたのは、やはり小昭を守るためだった。ふたりのことをもちだすことによって、小昭がそれほど『ずるく』はないことを証明したのだ。もちろんわたしにまったく『成果』がなかったわけではないことの証明にもなる。このことは自分のためのように見えるけれども、いま反省してみると、やはり小昭のためではないか。もしもういちど小昭をわたしにわたしてくれたら、小昭にとっていいことなのだ。」「でも

Kと萍は損をするだろう。……しかし二人だってわたしを許してくれなければならない。」「わたしは、すでにマークされている二人をもちだしたのだ。」「小昭とあんなに親密な二人が、自分の身の危険をほんのすこし増して、小昭の身にせまった大きな危険を減らしてやっていけないことはあるまい。」「まさかわたしだけが——かれらから見て魂のない犬も同然の女だけが、すべての責任を背負いこんで、かれらの『親愛な同志』小昭のために、安全と自由をはからねばならぬということがあろうか。」(十一月二十六日)。

ここまでたどってくると、われわれのまえに、恵明の問題性はようやくはっきりしてくる。まず第一に環境の問題である。彼女は、「人に損をさせて自分が得するものは悪人だ。自分に損をさせ人に得をさせるものは、むろん善人だ。だけど人に損をさせ自分も得をしないものは、いったいなんだろう。……もし結局人に損をさせ、自分も得をしないということになったら、それはきっとやりかたがよくないのだ。」と考える。だが「やりかた」の問題ではなく、彼女が権力の「走狗」であることが、やはり決定的な問題なのである。

第二に、恵明の主体性の問題である。ここで、作者自身のことばを引こう。茅盾は、恵明の形象と日記形式について、つぎのようにいっている。

「もし日記形式の小説の特殊性を考慮して、趙恵明の自責、弁解、自己弁護などを真正直に受けとることをしないならば、これらの自責、弁解、自己弁護などがそのまま、趙恵明の矛盾、個人主義、『大義にくらい』、節操の欠除を暴露していることが読みとれるであろう。(18)」

またつぎのようにもいっている。

「彼女は、聡明、敏腕であるが、虚栄心がつよく、『大義にくらく』(敵味方の区別が明確でなく)、高級特務の自分

に対する圧迫と侮辱とに反抗するが、反抗の動機は個人主義的、つまり個人の利害を基準にしたものであって、肝腎なところにくると、いつも腰くだけになる。[19]」

恵明の形象を全体的にどう評価するかについては、のちにふれることにして、当面、ここで茅盾が恵明のマイナス的性格としてとりだしている「矛盾」（矛盾はプラスの契機ともなるが）、個人主義、「大義にくらい」、節操の欠如、軟弱性、虚栄心などを、われわれがこれまでの叙述の中から発見することは、さして困難ではない。そしてこれらのマイナス的性格の中心に、個人主義、自己中心主義を位置づけることができよう。このことに関して、かつて吉田富夫氏が、「こうした弁解（第一の引用文――引用者）のうちにも、特務→否定的存在→批判的形象というふうにつながってゆく茅盾の一連の発想法が感じられる。注目すべきは、こうした発想法を支えている一種の決定論とでもいうべきものの存在である。」「これら（列挙されたマイナス的性格――引用者）はおそらく趙恵明という虚構化された個性に個有の性格というよりも、特務という一つの否定さるべき社会層に普遍なマイナス的性格として作者がとり出してきたものにちがいない。[20]」という見解をだしている。たしかに、茅盾の発想法には、「一種の決定論とでもいうべきもの」が存在し、それが形象の類型化をまねいている例が多くみられるのであるが、それを「決定論」とよび、その延長として、恵明のマイナス的性格を特務という社会層に固有なものとして、茅盾がとらえているかにいわれるとき、わたしは異った意見をもたざるを得ない。

この問題は、茅盾の文学の基本的な創造方法をいかにとらえるか、また『腐蝕』の後半で前半と対照的な相貌をみせている趙恵明の形象をどうとらえるかという点にかかわってくるように思う。したがってしばらく『腐蝕』のわくをはずし、茅盾の創造方法について、次章（補説）で、大まかながら若干の検討を加えておきたい。

四、趙恵明の形象　その二（補説）

――茅盾の基本的創造方法および趙恵明の形象の社会的位置について

茅盾が、その生涯にわたる文学創造の基本的構想を、はじめて明らかにしたのは、吉田富夫氏の指摘するとおり、「読『倪煥之』」（『小説月報』一九二九年八月）においてであった。そのとき、その構想は「時代性」を描くというややあいまいな概念を用いて語られたが、その後のかれの創造活動は、そこで語られた構想がしだいにより明確に意識され、追究されていった道すじを示しているといえる。

「時代性というのは、わたしの考えでは、時代の空気を表現するということの外に、さらに二つの要素をもっていなければならない。第一に、時代が人々にどのような影響を与えるか、第二に、人々の集団の活力がどのようにして時代を新しい方向に推しすすめていくか、換言すれば、どのようにして歴史を促進して必然的な新時代におしいれるか、さらに換言すれば、どのようにして人々の集団の活動によって早く歴史の必然を実現するか、ということである。現代の新写実派の文学が表現しようとする時代性というのは、このような意味のものである。」

ここでいう「集団」の意味は、まだ十分明確ではないが、「一人一人で時代の潮流に従って前へ進んだ無名の者が、どんなに多くいたことか！　これらの無名の者たちが集まって時代と社会の活力となったのだ」とか、「時代を推しすすめる社会の活力の一滴となる」などの表現から考えると、《人民こそ世界の歴史を創造する動力である》というときの「人民」ないし「大衆」に該当する概念なのである。してみると、この構想が㈠歴史変革の主体としての「集団」（＝人民大衆）、㈡「集団」の力で「必然」の方向へ変革されていく社会、㈢その社会の中の個人、㈣歴史変革の

立場にたつ作者、という四つの契機を含んでいることがわかる。したがって個人は、客体としてはそのような社会に制約されつつ、その影響を受けてさまざまに揺れうごく存在としてとらえられるとともに、主体としてはそのような歴史変革、変革の主体としての「集団」へのかかわりかたを問われることになるのである。それゆえに、茅盾のこの構想は、つぎの二つの基本要素をもつリアリズムに発展しうるものであった。

㈠歴史変革の立場にたって、歴史的、構造的に現実をとらえる。

㈡社会の中の個人の選択と帰趨（いわゆる「出路」）を追求する。

茅盾のリアリズムは、事実このようなものをめざして発展してきたといえる。文学創造の対象（題材）として、主として、小ブルジョアインテリ青年（特に女性）と民族ブルジョワジーが選ばれたのは、作者の題材に対する「熟知」や、読者対象の問題とともに、つぎにみるような中国の社会構造に対する茅盾の洞察が存在したためである。それはむろん、はじめはまだあいまいなものであったが、中国革命の発展にともなってしだいに明確になっていった。「従牯嶺到東京」（『小説月報』一九二九年十月）と「読『倪煥之』」とは、この洞察を独自にすすめつつある茅盾の努力の跡を示している。中国の社会構造の特徴についてはみたび何其芳のことばを借りることにする。

「中国は社会構成の面では、両端が小さく中間が大きい（無産階級と大地主大資産階級の人数はあまり多くない）。だが、中国が半封建半植民地の国家であること、さらに無産階級が長期にわたる訓練を経ていることによって、政治的力量の面では両端が大きく中間が小さい。」[21]

したがって革命の主体形成（労農同盟）の問題とともに、この中間階級の動向が中国革命の成否に重要な影響を及ぼすことになる。中国の中間階級の経済的、政治的地位からくるその脆弱性、動揺性が、茅盾の文学に主要なテーマ

と典型を与えているのは十分理由のあることであった。小ブルジョワ知識人にかぎっていえば、『蝕』、『虹』、『路』、『三人行』などの問題意識は、さきに述べたような意味での「時代と人間」（時代性）である。わたしはここで、小ブルジョワ知識人を描いた作品の先駆である魯迅の『孤独者』、『傷逝』（ともに一九二五年執筆）と、茅盾の『蝕』（特に「追求」、「追求」は一九二八年執筆）、『虹』（一九二九年執筆）とを対比させつつ、中国の小ブルジョワ知識人の問題性について、若干の検討を加えるつもりであったが、いまその余裕がない。そこで一点のみに限って述べておきたい。

それは、中国における近代的自我が、その社会的基盤の脆弱さのゆえに孤立したたたかいを強いられた中で、屈折し、あるいは反転した闘争手段をとって、結局自滅していった例である。

『孤独者』の魏連殳（ウェイリエンシュー）をみてみよう。かつての「新党」であるかれはその政治的挫折とその後の失業による困窮した生活、かれの生存を希った人の死のあとに、「自分の生存を願わないものたちのために生き」、「以前自分が憎悪し反対したすべてのことを自ら実行し、以前崇拝し主張したすべてのことを拒否し」て、封建軍閥の顧問となり、最後にその正装の軍服をまとわされて、ひとり死んでいく。こうした報復手段の採用は、失敗者としての絶対的な孤独、絶望、そして自滅を自分の外におし出し、定立することによって、ようやく心も軽く新たな彷徨に身をすすめていく語り手の「私」のいとなみを捨象して考えるならば、中国の批評家が、「魏連殳の異常な（原語「変態的」）報復手段は、反抗というより、むしろ投降というべきである」[22]というとき、十分根拠のある意見というべきであろう。

この魏連殳式のたたかいかたは、大革命挫折後の章秋柳（チャンチウリウ）（「追求」に登場する女性）の反抗に継承されているが、それには新たにヨーロッパの世紀末的頽廃の影がみられる。彼女は女性を玩物視する高慢な男たちを、自ら娼婦となって、その肉体の魅力で足もとにひれ伏させ、そのとたん力いっぱい蹴とばしたいという幻想にかられる。章秋柳の場

合は、実際にはこの手段は用いられず、他のことで自滅してしまう。だが、これに似た例は、蔣光慈『衝出雲囲的月亮』の王曼英（ワンマンイン）の反抗にもみられる（王は最後には道を見いだす）。

これらの現象は、それぞれ革命の退潮期に対応した、敗北をみとめつつも全面的降服に甘んじえないものの孤独なあらがいを示しているが、一面では、近代的自我の中心思想である個人主義の、現実への抵抗の武器としての有効性を、問うているものである。中国の小ブルジョワ知識人が、「新興階級（労働者階級を指す――引用者）の指導によって、真に帝国主義と亡霊（封建勢力を指す――引用者）とを転覆し、ごろつき資本と地主官僚との新しい結合を転覆する展望がきりひらかれた」とき、はじめて、「搾取制度に反対する自分たちの朦朧とした理想が、新興の、社会主義的先進階級とともに前進してこそ実現できること、偉大な、闘争する集団の中でこそ、真の『個性解放』に到達できること」[23]をついに発見するにいたった過程は、きわめて多様なものであったにちがいない（魯迅「非革命的急進革命論者」はその革命隊伍の形成についてすぐれた考察を行っている）。さきに述べた屈折した個人主義的たたかいも、条件さえそろえば、こうした全体的な展開に吸収されたであろう。先述した茅盾の「時代性を表現する文学」という創造上の構想は、すでにそれ自体の中に《個人主義から集団主義へ》という思想的命題をはらんでいたが、『虹』はその命題の形象的探究であった（その試みは、梅行素（メイシンスウ）がその自己改造の課題に逢着したばかりのところで中断されたが）。

ところで、小ブルジョワ青年の分化（図式的にいって革命と動揺と反革命への）過程がすすむにしたがって、かれらの前に横たわる陥穽も一方で多くなっていった。そして、その陥穽として、特務の境涯におちこむことほど、危険なことはあるまい。だが少くない青年がそこへおちこんだことは、歴史の語っているところである。胡華（フーホア）『中国新民主主義革命史』（邦訳大月書店）は「第二次反共高潮」当時の国民党統治区の青年・学生の状態について、つぎのように記し

ている。

「復興社の特務系統（『軍事委員会調査統計局』略称『軍統』のこと――引用者）に操縦される、非常に大規模な、『三民主義青年団』とよばれる反革命組織がうまれ、青年学生を金と力で特務活動にひきいれた。また……各地に、人間の精神をくじいてしまうところの世界でももっとも残忍でもっとも恐怖にみちたファショの『集中営』『労働営』が設置されて、各地の進歩的な抗日青年を逮捕・抑留して精神的・肉体的に苦痛と圧迫をあたえた。当時、とらえられていた青年男女は、総計一〇万――二〇万の多数にのぼっていた。いっさいの進歩的な抗日団体、書店、出版物は、いずれもつぎつぎに破壊された。学校教育のうえでも、有名なファシストの巨頭陳立夫（チェンリーフ）が教育部長を担任し、ヒトラーのやりかたをうけついで、各学校にファショ的『訓導』制度を設置、強化して、ファショ的愚民教育を実施した。」

われわれはこの記述によって『腐蝕』の背景を知ることができる。日中戦争が生んだ多数の難民と流亡青年・学生たちは、このような状況の中で、革命陣営の予備軍ともなり、また反革命陣営の予備軍ともなったのである。また、われわれはここで、茅盾の最初の作品「幻滅」の章静がはじめて自分を与えた相手が軍閥のスパイ学生であったことも思い出すことができる。

以上のことから一つの結論を述べるならば、作者が趙恵明に付与している自己矛盾や、個人主義は、特務としての社会層に固有な性格などではなく、小ブルジョワインテリ青年の属性としてとらえられているのであり、そしてそれらのマイナス的性格は、作者が一つの階層に対して抱いている「概念」というよりむしろ、一方で小ブルジョワ知識人を暗黒の陥穽におとしいれる弱点として、他方でかれらが暗黒を破って光明に向かうために克服すべきものとし

て、つまりその「課題」としてとらえられているのである。

一人の青年が「特務」であるという事実はあまりに重い。けれども、恵明のさきにみた「復讐」の情念や、つぎに引用する思想は、その「特務」であることに甘んじえない一人の女性の、孤立し屈折したたたかいの相を示しているといえよう。

『死ねばそれまでじゃないかと、わたし何度か考えたことがあるの。だけど今日までこうやって死なないできた。どうしてわたしが死ななきゃならないんでしょう。それゃ何か大きな仕事があるわけじゃないわ。死んだってだれも何とも思いはしないでしょう。でもね、わたしが生きていれば、少くともひとりふたりには、少しぐらいは居心地のわるい思いをさせてるわ。こんな犬より下等な連中がわたしの死骸を見ながらさも痛快そうに笑うなんてこと、許せるもんですか！』[24]（十二月二十二日）。

五、趙恵明の形象　その三

さて、話を物語にもどそう。その後、恵明は、追打ちをかけるかのように、Kと萍を偵察せよ、「色じかけ（原語「恋愛方式」）」を用いてKを釣り上げよという命令を受ける。その後の展開も、またKと萍に対する恵明の矛盾した心理も、けっして単純ではないが、それをここで詳細に追うことは必要ではないだろう。Kと萍の側には、弾圧に耐えて歴史を前進させつつある集団が存在するのに、恵明には一人の信頼すべき友人もいない。Kたちの側には、特務である恵明に対する当然の警戒がある。恵明には、萍に対する嫉妬と羨望や、かれらの自分への警戒に対する焦燥感がある。だが恵明が、そうした両者の間の壁をこえ、わが身の危険を冒して、Kたちの部署に潜伏するスパイの存在を

教えたのは、彼女の中にある一片の人間性の得がたい勝利への一歩であった。そのことは、かりに彼女が小昭の死後、特務仲間の暗闘の一つを清算するために犬死させられたとしても、彼女の生涯の暗黒部に最後の小さな一灯をともしたであろうし、もし彼女が更生の道に進むことができた場合は、まぎれもなくその第一歩となるべきものであった。

一九四一年の元旦、趙恵明は、小昭の死を知ったあとの虚脱状態をのこしたまま、「大学区」へ移ってくる。彼女はそこの郵便局で検閲の仕事にたずさわることになる。物語はここから後半にはいる。ところが作者によると、この後半部は、趙恵明に更生の道を与えてほしいという読者の要求にしたがって、小昭の死のところで完結するはずであった当初の計画を変更し、ひきのばしたものであるという。(25)

この部分の筋の運びに若干の無理があることは、早くから小野忍氏が指摘していたところであるが、(26)この『腐蝕』という題名のつけかたなどから考えても、作者が趙恵明に「絶路」(出口なし)を与えるつもりであったと、想像できないことはない。(27)してみると、作者が、読者の要求をききいれることにしたとき、その最大の努力は、文学的リアリティを傷つけることなく、趙恵明に更生の道を与えるにはどうすればいいかという点に、そそがれたと考えられる。その結果見いだされたのが、Nである。五、六年前の恵明同様、「誘惑され強迫されて、どうしようもないまま、一歩一歩破滅の道を進み」つつある流亡女子学生である。彼女の場合も、Fと老倀(奨学金を一人で三人分せしめている「青年幹部」)とからその肉体を狙われている。「皖南事変」後の、クラスの人数が一日で二十数人も減ってしまうという気ちがいじみた情勢の中で、彼女が自分の同級生を売ったりできぬこと、また国民党と共産党との団結を願って、そのことを学生たちの前で口に出したりすることが、彼女を窮地に追いこんでいく。結局、恵明はこのNを窮地から救

いだして、恵明の父親の住んでいる隴東（甘粛省東部）へ送るという自己犠牲的な行為によって、はじめて自分を救うことになるのである。ストーリーは推理小説もどきに急ピッチで進行し、恵明の心理もそれほど複雑ではない。ここで重要なのは、一つは、その自己矛盾が、自分を救いたいという欲求と、罪の意識との起伏消長としてあらわれ、それが最後までこの作品に不安な翳を与えていることである。他の一つは、そのような不安の翳にややもすればくじけそうになる恵明に対して、作者は、物語の展開にKと萍からの二通の書信と、一つの夢とを配することによって、いわば外部から力を加えていることである。わたしは、この後者の問題について、ここで検討を加えることにしたい。

最初に恵明を虚脱状態から救いだしたのは、Kと萍から寄せられた手紙であった。

『かれらは彼女の忠告をいれて、すでに身体検査をすませた。潜伏していた病原菌も発見された。暫時の休息が必要となった。彼女は安心していい。むしろ彼女自身の健康のほうが、かれらは気がかりだ。』『かれらは彼女の境遇を思うたびに、こもごも憤慨と憂慮とにかられる。』『環境を創造するのは自分だけである。』『彼女はきっと新しい生活を創造することができる。無数の友情の手が彼女をさしまねいている。』（一月十三日）。

この手紙によって、彼女は、自分にまだ生命の残り火のあること、自分がまったくの孤独ではないことを感じ、「だが、わたしはどのようにして新しい生活を創造すべきか」と考えこむ。

第二の手紙は魯迅の「半夏小集」（『且介亭雑文末編』）からの抜き書きである。

「莊生（莊子）は、『上にあっては烏鳶（うえん）に食われ、下にあっては螻蟻（ろうぎ）（けらと蟻）に食わる』、死後の身体は、どうなろうとかまったことではない、どのみち、結果は同じなのだから、と考えた。

私は、それほど闊達にはなれない。かりに私の血や肉を動物に食わせなければならないとしたら、どうか獅子や

虎や鷹や隼に食わせたい。かさかき犬どもには、一片たりともやりたくない。

獅子や虎や鷹や隼を肥えさせれば、彼らは天空に、岩頭に、砂漠に、密林に、雄壮なる美観となるであろうし、捕えて動物園に置いても、殺して剝製としても、見る人を恍惚たらしめ、卑しい心を消し去らしめるであろう。だがかさかき犬どもを肥えさせたところで、むやみに馳けまわり、吠え立てるだけで、さぞうるさいことだろう！」（竹内好訳。岩波旧版『魯迅選集』十二巻）。

「半夏小集」は、一九三六年七月に、病気と「国防文学論戦」との中で書かれた（魯迅の死は同年十月十九日）。いまわれわれがそこに収められた九篇の短い文章を読むとき、その感想は複雑なものとならざるをえない。中国の労働人民が、その抗日統一戦線を、いままでの憎むべき仇敵をも同盟者に変えてつくりだしていく過程の、陣痛の呻きがそこにはあるが、そのことにはここでふれない。この引用された文章の『腐蝕』の中で意味するところは、ことさら説明するまでもないであろう。茅盾自身が一九四二年に書いた旧詩に、「搏天鷹隼困藩溷、拝月狐狸戴冕旒。落落人間啼笑寂、側身北望思悠悠。」（天を搏つ鷹隼藩溷に困しみ、月を拝す狐狸冕旒を戴く。落落たる人間啼笑寂として、身を側めて北を望めば思ひ悠悠。）と詠じたのも、この魯迅の文章を受けている。(28)

ところが、この手紙を受けとったときの趙恵明の反応は、この文意をかならずしもそのまま理解してはいないもののようである。彼女は、「変な話！かさかき犬を肥らせるために自分を食わせたいなんて思う酔狂なものがいるだろうか！」とつぶやいて、もっぱらその筆蹟がなじみのないものであること、自分の指定したあて名に若干のちがいがあることのほうに気をとられて、あれこれと気をまわす。いささかわかりにくいところであるが、そこに作者の用意を見るべきなのかもしれない。つまり、彼女がここでこの文意をつかめなくとも、この文章は彼女に対して、その新

しい生き方を示しているのである。結局、彼女にとっては、自分自身の行為によって、これまで「かさかき犬に自分を食わせ」てきた生活を、自分の罪をもいささかとも洗いうる形で、脱出することが必要なのだ。そして、そのような行為が、Nの救出として、趙恵明によって選択されていくのである。

事態の急進展によって、迫られて、その行為へ一歩を踏みだしたあと、恵明はつぎのような夢を見る。やや長すぎるけれども、小論のテーマにかかわることであるから夢の全部分を引用したい。

「夢を見た。原野を、わたしとNが手をとりあって、一歩一歩あるいている。ひっそりとして、はてしなく広がった原野だ。よく知っているところのようでも、また見知らぬところのようでもある。泥地には、獣や鳥の足跡が一面についている。でも、人間の足跡もある。わたしたちはまちがえぬように人間の足跡を見分けながら、さきへすすんだ。遠くから調子のよい声が聞こえる。だが歌ではない。ちょうど労働する人々が『エイホーッ』と掛け声をかけているようだ。……真向かいにさっと人影が現われた。たしかにKと萍だ。こちらに向かって大声で叫んでいる。『急いで歩きなさい！　うしろから追っかけてきてますよ！』わたしはあわててふりかえった。冷たい霧がこめていて、追手の姿はよく見えない。Kと萍のほうを見たら、もういない。わたしはどぎまぎしてたずねた。『N、あの人たちどこへいったんでしょう。』返事がない。見ると、わたしと手をつないでいるのは、なんとNではなくて小昭なのだ。わたしは驚喜の声をあげた。『まあ、あなたはまだ……』いい終えぬうちに、小昭はさっと上衣の襟を開いた。――わたしはあっと叫んだ。襟の内側が、肉体ではなくて骸骨ではないか。だが、冷えきった肋骨の内側で、赤くて大きい心臓が、熱く燃えながら、とつとつと鼓動しているのだ……」

茅盾の随筆集『速写与随筆』の中に「沙灘上的脚跡」という散文詩風の一篇がある。その文中で、茅盾は、野獣の

足跡、人間の名をかたる妖怪の足跡、また光明を追求する人間をたぶらかす鬼火などに満ちた砂洲を、ひとりの人間が、自分の心臓の火をたよりに、砂に埋もれた真実の人間の足跡を見さだめながら歩いていく、のちにはその足跡が同一方向にむかってしだいに数多くになっていく光景を描いた。心臓の火の形象は、おそらく、暴風雨の密林を民衆を導いて、自分の心臓の火を高くかかげて進むあのダンコの民話（ゴーリキー『イゼルギリ婆さん』[29]）から借りたものであろうが、茅盾の文章ではひとりひとりがそれぞれ自分の心臓の火をかきたてて進んでいく。そこに、『蝕』から『虹』にいたるあいだのかれの思想と自覚が反映されている。茅盾は、この象徴的な文章を『腐蝕』に用いたのである。それは、かれが「白楊礼讃」や「風景談」で同じく象徴的に描きだした解放区人民の新しい集団的な労働や闘争を背景として、「沙灘上的脚跡」にまだ見ることのできなかった明るさを一方に帯びているのである。小昭の心臓の火が恵明の道を照らしている。

「わたしは自分の『行動』によって、わたし自身を立て直そう。」「最後に、わたしがのこる。——ふん、わたしはもうずいぶんながいあいだ辛抱してきた。……あとしばらくの辛抱などなんでもない。三カ月、六カ月、一年がかりでもやりぬくつもりだ。」（二月十日）。

この際にこそ、男のような手腕と面目を発揮しなければならぬ、と彼女は思いつめる。

物語はここで終わる。最後の二月十日の章は、いままで彼女につきまとってきた罪の意識と不安感が払拭されて、決然とした語気でつづられている。たとえば、前々日の章で、Nが「わたしたちの目の前には、新しい天地が開けていて、わたしたちはそこで人間に生まれ変わるのよ」と語りかけるのに対して、罪の意識に悩まされて嗚咽する趙恵明の姿と比べてみるとよい。ここにわれわれは、犯罪者としての恵明を救いあげるために作者が払ったリアリストと

しての努力をみることができる。だが、にも拘らず、それが十分の立体感と統一感とをもってわれわれに鮮明な印象を与えているかといえば、否といわざるを得ない。そのことは、魯迅の「半夏小集」中の一文を、さきにみたように、恵明と感情的に直接ふれあわない形で挿入したこと（あの夢でさえ、恵明に与えた印象は、前進的なものというより不安感のほうがつよいように、わたしにはとれる）とも関連があり、主人公に救いを与えることに対する作者のイメージが十分成熟していないことを示しているものであろう。(30)

茅盾自身は、かれが読者の需めにこたえて、恵明に更生の道を与えたその根拠について、後年つぎのように述べている。

「これらの（欺かれ脅迫されて特務組織内におちこんだ多くの青年の――引用者）共犯者たち（たとえこれらの共犯者の手が血で汚れていようとも）を分裂させ解体するために、『腐蝕』の趙恵明に更生の道を与えることは、当時の宣伝方策の点からみて、わるいことではなかっただろう。(31)」

この個所も含めて、一九五四年に書かれた「『腐蝕』後記」には、作品の中にみられる主人公に対する同情と批判とのバランスがくずれて、やや冷たくつき放した姿勢が感じられる。しかし、ここに述べられた「宣伝方策」上の意図と人物形象の合理的な発展との葛藤の克服が、作者の課題として十分に意識されていたことは明らかである。Nを救うという恵明の行為は、明らかに『狂人日記』の結末の「人間を食ったことのないこどもはいるだろうか。こどもを救え……」に対応するものである。やや唐突な感じを与える『狂人日記』の結末が、「狂人をあしもとからひっさらって完結した暗黒に対する、作者自身の態度の直接の表明(32)」であるのに対し、『腐蝕』の場合は、作者の似かよった動機に発しながら、不十分とはいえかなりのリアリティを獲得しえているのは、暗黒をうち破って自ら光明をもたら

さんとする集団がすでに確かな歩みをすすめつつあるためであり、また趙恵明がストーリーの発展をささえるに足るだけの個有性（一定の階級・階層・性格・経歴など）を持っていたためである。さて、その後の恵明はどうなったか。

作者は、この日記が重慶のとある防空壕内で拾得されたものであるかのように虚構している。その経緯を記した序文の中で、この日記を公にするのは、「これを借りて、青年の幸福に関心をもつ世の人々に、今日の青年たちが生活上の圧迫と知識の飢餓だけでなく、さらにこのような口に言いがたい苦痛を受けていることを訴えて、よりいっそうのご注意をお願いする」ためにほかならないと述べたのちに、作者はさらにつぎのように書き添える。

「この日記の筆者がもしなおこの世におられるならば、どうかわたくしの失礼を許していただきたい。もし不幸にしてすでにこの世におられないならば、その霊魂の安らかならんことを祈る。」

この作品全体から、主人公に対する作者の鎮魂の思いの、深くつらぬいているのを感じとるのは、わたしだけの独り勝手な感想ではあるまい。われわれがNの脱出成功と恵明の死とを想像するとき、この一人の女特務の自己と環境とに対するたたかいが、まぎれもなく中国革命の大道の小さな捨石の一つとなっていることをつよく感じるのである。

おわりに

以上、わたしは『腐蝕』を書いた時期の茅盾の生活と閲歴、『腐蝕』における《現実暴露》の方法と内容、およびその暴露の創造方法上の位置づけ、趙恵明の形象（典型）の社会的位置づけ、『腐蝕』の物語の展開のはらむ問題などについて分析をこころみ、私見を述べてきた。また、茅盾の文学の基本的な創造方法についても言及した。わたしがあつかった範囲だけに限ってみても、まだ疑問点は多く、われわれ研究者間の議論もきわめて不足しているように

思われた。まして、『腐蝕』のはらむ問題は、けっしてこれにつきない。諸氏のすでにふれておられる問題で、自分なりに考察を加えたいと思いながらふれる余裕なしに終ったものも多い。例をあげれば、日記形式の中国における伝統の問題（わたしは『莎菲女士的日記』に若干ふれたにとどまり、また『狂人日記』にもわずかしかふれることができなかった）、この形式と読者との問題などがある。またこの形式のもつ抽象性の問題もある。『腐蝕』は、茅盾の長篇小説の中で、もっとも芸術的完成度の高い作品といえるが、その完成度はほとんどこの形式のもつ抽象性にささえられていると思う。茅盾が、もし趙恵明の罪状を具体的に描写したら、この作品の展開はもっと異なったものになるだろう。それを過去のこととして出発したために、現在みるような作品になりえたのではないか。もし三人称体で書いたらどうなるか。茅盾の生活体験と材料とではとうていたえられるものではなかったろう。ましてあのような生活の中でそれをやりとげることは、事実上無理なことであったとさえ思う。やはり、この日記形式も、戦争という現実が茅盾に強いたものではないだろうか。『狂人日記』と同じく暴露の衝迫がこの形式を選ばせたとも考えられる。

また『子夜』の諸人物がついに類型的なる欠陥を免れていないのに、『腐蝕』の趙恵明がいきいきしているのはなぜか。この問題も、日記形式と関係があろうが、それ以外のもっと重要な要素（典型論の問題）もあると思う。恵明が周定慧、孫舞陽、章秋柳、梅行素、張素素の系列に立つ形象であることも重要である。さらに重要なのは、解放区の文学、のちの「人民文学」との関連の中での『腐蝕』の位置づけの問題である。その他にもなお多くの問題点があるであろう。そうしたものの追究を今後の課題としてのこし、いまはしばらくつぎのことばをもって結びとしたい。

『腐蝕』も、『屈原』と同じく、抗戦期中国の現実が、作者茅盾に強いた一つのたたかいの形式であり、民族的憤怒と、作者の資質や蓄積を十分に結びつけて、みずみずしく開いた作品である。それは趙恵明という形象を彫り上げ、

現実の暗黒部を開示した。この作品において、現実の構造的把握、個人の「出路」の追究、文学的通俗性の三者は、はじめてその統一的達成をみた。このような意味で、竹内好氏のいう文学の発展と民族の進歩を一致させる方向をつらぬいた一つの証(あかし)しとなったのである。（一九七二年十月二十日）

注

（1）「中国文学とヒューマニズム」一九四八年執筆。『新編　現代中国論』（一九六六年、筑摩書房）所収。

（2）「茅盾伝」一九四八年執筆。『魯迅雑記』（一九四九年。世界評論社）所収。

（3）本章の記述は、『茅盾文集』（人民文学出版社）全十巻に収められた作品の後記、補記類を基本資料とし、つぎの文献で補った。

穆欣「一九三七年至一九四五年新聞界大事記要」。張静廬編『中国現代出版史料』丁編上巻（一九五九年、中華書局）所収。

以群「『文藝陣地』雑憶」。『中国現代文藝資料叢刊』第一輯（一九六二年、上海文藝出版社）所収。

葉子銘(イェツーミン)『論茅盾四十年的文学道路』（一九六三年、上海文藝出版社）。

また、つぎの各文献を参考にさせていただいた。

東京都立大学中国文学研究室編「茅盾評論目録」（増訂版）。同研究室編刊『茅盾評論集』第五集（一九六六年）所収。

小野忍「茅盾」（『人と作品』）一九七一年改稿。『中国の現代文学』（一九七二年、東京大学出版会）所収。

（4）茅盾「談杜重遠的冤獄」、東京都立大学中国文学研究室編刊『茅盾評論集』第二集（一九五八年）所収。

（5）邦訳、竹内好訳「西北見聞記」。『中国現代文学選集』十五（一九六二年、平凡社）所収。

（6）「大後方」は、抗日戦争中の日本占領区（「淪陥区」）、前線（「抗戦区」）に対する後方のうち国民党統治区をいう呼称。

（7）邦訳、小川環樹訳「風景の話」。『北斗』四号（一九五五年）所載。

（8）「特務文学」は直接には特務工作員を描いた文学を指す。茅盾「文藝節的感想」（一九四五年、前掲『茅盾評論集』第二集）では別に「間諜文学」という。同評論集に収められた「八年来文藝工作的成果及傾向」（一九四五年）、「在反動派圧迫下斗争和発展的革命文藝」（一九四九年）によってみても、一九四〇年代の国民党統治区の「大政翼賛会的」な文学を代表するほとんど唯一の作品群である。特務機関（文化特務）と密接な関

係があったと想像されるが、詳細は不明。後日を期したい。

(9) 何其芳「文藝的堕落」一九四六年。『関于現実主義』(一九六二年、上海文藝出版社)所収。作品例は、荊有麟(チンヨウリン)「間諜夫人」。何其芳は、「特務文学」として、もう一例、陳詮(チェンチュアン)「野玫瑰(リンメイチー)」(戯曲)をあげている。陳詮は、林同済らとともに雑誌『戦国策』に拠ったファショ的な文芸理論の提唱者。劉綬松(リウショウスン)『中国新文学史初稿』下(一九五八年、作家出版社)六六頁参照。

(10) 抗戦期における芸術至上主義的な文芸主張の代表例は朱光潜(チューコワンチエン)「文藝上的低級趣味」、「文芸と抗戦無関係論」の提唱者は梁実秋(リャンシーチウ)である。『中国新文学史初稿』下(前掲)六二〜六四頁。

(11) 何其芳「評『天国春秋』」一九四六年。『関于現実主義』(前掲)所収。

(12) 一九五一年再版、中外出版社。汲古書院一九七一年影印。影印本には間野潜龍氏の「解題」が付されている。

(13) 葉子銘『論茅盾四十年的文学道路』(前掲)一四四頁。

(14) 一九二七年の反革命(四・一二クーデター)のときにいわれたことば。一般に、「皖南事変」は、「四・一二」の再来ではないかと憂慮された。こうした点からも、『腐蝕』は、二七年の大革命挫折の体験をもとにした『蝕』と、一つの対応関係にたっているといえる。また、一月十九日の章に、Nが恵明に向かって「歴史はくりかえすという人もいるし、大きな敵を前にしてそんなはずはないという人もいるけれど、あなたはどう思って」と問う部分がある。

(15) 「論加強批評工作」「暴露与諷刺」(ともに一九三八年)は、『茅盾評論集』第五集(前掲)所収。「八月的感想」(一九三八年)は、同書、第二集所収。

(16) 北京師範大学中文系現代文学教改小組編『中国現代文学史参考資料』第二巻(一九五九年、高等教育出版社。大安一九六六年影印)に節録。

(17) 高畠穣「丁玲」(竹内好・岡崎俊夫編『現代中国の作家たち』一九五四年、和光社)では「告白性」「告白的発想」、北岡正子「丁玲文学における『革命』の誕生」(『東洋文化』五二号、一九七二年)では「自己告白体」という語がつかわれている。

(18)(19) 「『腐蝕』後記」(一九五四年)。『茅盾文集』第五巻所収。

(20) 吉田富夫「茅盾文学序説—『腐蝕』を中心として—」(『中国文学報』第十二冊、一九六〇年)。

(21) 何其芳「『清明前後』的現実意義」一九四五年。『関于現実主義』(前掲)所収。毛沢東「関于打退第二次反共高潮的総結」(一九四一年、『選集』二巻)によっている。

(22) 黄侯興(ホワンホウシン)「魯迅思想初探」(『北京大学学報』人文科学一九六一年第五期。朵華書林影印本同「文学編」第三集)。

(23) 瞿秋白（チュイチウペイ）「『魯迅雑感選集』序言」一九三三年。『瞿秋白文集』二（一九五三年、人民文学出版社）所収。

(24) この考え方には、魯迅の「写在〝墳〟後面」に示された思想に通ずるところがあり、さきの「復讐」の考えは、「孤独者」魏連殳のそれに通ずる。

(25) 「『腐蝕』後記」（前掲）。

(26) 小野忍「茅盾」（三、『腐蝕』）一九四七年。『中国の現代文学』（前掲）所収。

(27) このことと、さきに述べた、この作品において、なぜ恵明が特務の境涯に身をおとしたのかという過程が十分形象的に書きこまれていないことと関係があるだろう。主人公の更生を考えず、もっぱら主人公の暗黒と滅亡をもって、現実の暗黒を暴露せんと意図する場合に、その過程はぼかされていてもかまわないのである。これは、『狂人日記』において、主人公がどのような過程を経て狂人になったかがほとんど描かれず、最初から狂人として登場することと共通する。Nの登場によってはじめて、その過程は形象的に明らかとなってくる。ただ相違点は、趙恵明の形象が、『腐蝕』においては、後半への発展を保証するに足る個別性をそなえていることである。

(28) 「無題」（『茅盾文集』第十巻所収）より節引。

(29) 上田進・横田瑞穂訳編『ゴーリキー短編集』（一九六七年、岩波文庫）所収。

(30) つぎにあげる小野、吉田両氏の見解も、この茅盾の、主人公の救済に対するイメージの未成熟を、一面から指摘したものであると思う。

小野忍氏の見解（前掲「茅盾」三、『腐蝕』）。

「茅盾にとっては小昭も、Kも萍も、その他もろもろのわるものどもも、日記の主人さえも、現実暴露のための道具である。そしてここには現実打開の方途も理想も示されていない。読者の感ずるものは暴露に対する作者の情熱である。」

もっとも、この見解は一九四七年に書かれたものであり、その後一九六〇年に書かれたつぎの見解によって、すでに修正を加えられていると思うのであるが、いかがであろうか。

「後段が付け加えられても、それほど不自然な感じがしないのは、主人公に対する作者のいたわりが全篇につらぬかれているからであろう。作中人物の感情と作者のそれとが重なりあっていると前にいったのはその意味においてである。『子夜』が『調べた芸術』であるのに対して、『腐蝕』には作者の複雑な感情がこめられているようである。」（同氏訳『腐蝕』解説。一九六一年、岩波文庫）。

吉田富夫氏の見解（前掲「茅盾文学序説――『腐蝕』を中心として――」）。

「明らかに不自然なこうした数句（二月九日深夜の章の末尾の数句を指す――引用者）を作品の結末近くにわざわざはさん

で、恵明の自己中心的傾向の存在を読者に気附かせなければおさまらむかった程、茅盾の趙恵明に対するエゴイズム決定論は動かしがたいものであった。」「いずれにしても、前半部と後半部とをつないでみた場合の作者の姿勢はいくらかあいまいであり、そのことが、この小説の読後感を多少損うことになっているのは惜しまれるのである」。

(31)「『腐蝕』後記」（前掲）。

(32) 木山英雄「『野草』的形成の論理ならびに方法について――魯迅の詩と〝哲学〟の時代――」（『東洋文化研究所紀要』第三十冊、一九六三年）。

テキストについて

「『茅盾文集』第五巻説明」は、『腐蝕』の最初の単行本について、一九四一年秋、上海華夏書店出版とするが、未見。小論ではつぎの三種を参照した。

(1)『腐蝕』中華民国三十年十月初版、同三十四年九月再版。上海、知識出版社刊。

(2)『腐蝕』一九五一年一月初版、一九五一年九月三版。北京、開明書店刊。

(3)『茅盾文集』第五巻（『劫後拾遺』と併収）。一九五八年八月北京第一版。人民文学出版社。

※(1)、(2)は同内容。(3)は若干語句の訂正がなされている。もっとも大きな訂正は、旧版の「一月二日」の日付を「十二月三十日」に改め、それにともなって、「元旦晩上」を「昨晩上」にかえるなど手直しを行なっていることである。このことからも、後半の執筆がある程度あわただしく決定されたことが理解できよう。またいくつかの改訂個所は、つぎの(4)に注記されている。

『腐蝕』本文の読解、引用文の翻訳については、つぎの訳書にご教示を受けることが多かった。

(4)『腐蝕』、小野忍訳。一九六一年二月、岩波書店刊（岩波文庫）。